

領域「表現」における効果的な音楽教材の活用に関する調査研究

— 子どもの「生きる力」を育む音楽表現指導とは —

河北 邦子

A Study of Effective Utilization of Musical Materials in the Field of Expression: A View of Using Musical Expressions to Develop the Liveliness of Children

Kuniko KAWAKITA

現職保育者を対象としたアンケート調査により、幼稚園教育要領・保育所保育指針に示される領域「表現」のねらいの浸透性と有効性を検証した。具体的には、音楽教材個々に対するねらい「感性」「表現」「イメージ」の設定と達成度、及び活動の内容、時期、場面等について調査し、それらに関連づけて検討した。1～6歳児の音楽表現活動では、3つのねらいの浸透性及び有効性は高いものの、低年齢において設定・達成には特徴があった。一つの教材が多くの場合「歌う」を柱に複数の活動で展開、年度を2分する教材活用方法の周期的な転換、また生活全般にわたる指導など、子どもの表現力育成のための、音楽教材の効果的な活用の在り方を明らかにした。

Keywords : 音楽表現活動、教材、ねらい、感性・表現・イメージ、達成、活動内容・時期・場面

はじめに

平成18年10月に文部科学省より平成18～22年度を実施期間として「幼児教育振興アクションプログラム」¹⁾が発表された。これは国が幼児教育の振興に関する施策を効果的に推進するために定めたものであり、地方公共団体の具体的な取り組みの施策をも示した、総合的な行動計画である。その根底となる考え方として、平成17年の中央教育審議会答申の記述があり、「家庭」「地域社会」「幼稚園・保育所等の施設」のそれぞれが幼児教育を充実させることや、連携を図る必要性が示されている。また7つの施策の柱が掲げられ、第5項目には「幼稚園、認定こども園が『親と子の育ちの場』としての役割を担い、子育て支援機能等を充実させることにより、家庭や地域社会の教育力の再生・向上を図る。」²⁾とある。幼稚園・保育所が、家庭や地域社会と共に幼児教育に対する役割を担う一つの組織と位置づけながら、同時に家庭や地域社会からの期待に応えることを求めている。そして、子育てに最も大きな役割を担う母親は、核家族が家族形態の中心となっている社会状況にあって、自己の役割に不安を抱き³⁾、子育ての専門機関である幼稚園・保育所への依存は益々高くなる傾向がある。加えて平成20年の世界的な経済危機による社会環境の変化が、家庭の子育て環境に少なからぬ影響を与えることが懸念される。

このような社会環境の下で、幼稚園・保育所の役割は、より幅広く、深く求められており、その期待に応え、役割を遂行していくのは保育者である。そして、保育者が拠り所とするのは文部科学省が示す幼稚園教育要領であり、厚生労働省の保育所保育指針である。平成21年度施行の

新幼稚園教育要領をみると、第1章 総則、第1項 幼稚園教育の基本は「幼児期における教育は、生涯にわたる人格形成の基礎を培う重要なもの…」と加筆され、第2章 ねらい及び内容は「幼稚園修了までに育つことが期待される生きる力の基礎となる心情、意欲、態度などであり…」とこれまでの踏襲した記述となっている。幼児期から、「生きる力」を育むことを理念とし、指導する事項として健康、人間関係、環境、言葉、表現の五領域を掲げ、幼児期の教育に小・中学校で期待される健康・体力、豊かな人間性、確かな学力の基礎固めとしての期待が述べられている。今回取り上げる領域「表現」の目標「感じたことや考えたことを自分なりに表現することを通して、豊かな感性や表現する力を養い、創造性を豊かにする」、及びねらい「(1) いろいろなものの美しさなどに対する豊かな感性をもつ。(2) 感じたことや考えたことを自分なりに表現して楽しむ。(3) 生活の中でイメージを豊かにし、さまざまな表現を楽しむ。」には変更が無く、これらが重要、かつ維持・継続の必要性が高い普遍性のある内容と捉えられる。このねらいを、これまで同様、また今後とも浸透させ達成していくために、現状の「ねらい」の浸透とその有効性について検証する必要がある。

本研究では「生きる力」を育むという大きな目標のもと、現職保育者が領域「表現」の一つである音楽表現活動において、幼稚園教育要領や保育所保育指針に示される「ねらい」をどのように意識し、教育・保育実践に結びつけているのか調査する。「ねらい」の具現化の実情を知るとともに、「ねらい」を達成するための効果的な音楽表現指導の在り方について考えたい。

1. 目的

幼稚園・保育所での音楽表現活動は、音楽教材を初めとしたさまざまな構成要素によって成り立ち、それらの要素は互いに関連をもち、影響し合っていると考えられる。そこでまず、音楽活動を構成する要素を整理する。大きな柱として、活動の主体である「子ども」と「保育者」、「教材」、さらに活動が行われる時空を「環境」とし、各柱の側面と、側面に内在する諸要素を抽出、整理し、要素の一部を本研究の調査の視点として取り上げる。

調査の中心に据える「教材」を楽曲と捉え、言語的側面（音韻、言葉、文節、文章、構成等）と、音楽的側面（リズム、メロディ、拍子、ダイナミック、音色、音域、和音、構成等）とする。教材は、一般的には教材機能別分類表⁴⁾に示される通り表示や実験用の道具等広い意味を持つが、本稿では小・中学校の音楽科において「共通教材」という言葉で示すように、狭義の楽曲を示すこととする。以下、幼児教育の現場で用いる幼児歌曲やわらべうた等の楽曲を教材と表わす。

活動の主体である「子ども」は、年齢や性別、及び身体器官の成長や機能的能力の発達と関連する表現的側面（歌う、身体表現、手・指あそび、聴く、楽器あそび、つくる、ゲーム性のあるあそび等）と、社会的側面（保護者と一緒に、保育者と一緒に、友だちと一緒に、指示に従う、ルールを守る等）とする。

もう一つの活動の主体である「保育者」は、ねらいを設定し、活動・教材を選択・構成し展開すると共に、自らが音楽環境の役割を担う。個人的側面（子どもへの思い、保育者としての認識、保育経験、保育・指導力への自信・意欲、表現力への自信・意欲等）と、所属組織の側面（所属

園の方針、保育者間の役割、所属園の住環境、園内研修、園外研修等)とする。

さらに、活動を展開する際の子どもと教材と保育者をつなぐ時空である「環境」は、時間的側面(年、季節、月、日、時間)と、教育・保育機関での1日や1年の流れの中で設定される空間的側面(朝・お帰りの会、設定保育、自由遊び、誕生会、諸行事等)とする。

本研究では、現職保育者が子どもの「生きる力」獲得をめざし、音楽表現活動をどのように位置づけ、どのような評価しているのかを、教材とそれに対するねらいの設定の在り方、及び達成度をみることで、幼稚園教育要領・保育所保育指針の領域「表現」に示されるねらいの浸透と有効性を検証する。併せて、ねらいの設定・達成と、音楽活動の構成要素を関連づけることで、ねらいを達成するためのより効果的な指導の在り方を明らかにすることを目的とする。

2. 方法

音楽表現活動の指導効果を測定するための尺度として、幼稚園教育要領・保育所保育指針に示される3つのねらいを設定した。

調査の方法として保育者に対するアンケートを行う。もとより保育者は、子どもの成長・発達への願いや子どもの成長に大きく関与するという使命感をもつ。子ども個々の心身の発達を認識・理解し、教材の選択や活動の展開を構成し、子どもたちが楽しいと感じる保育を目指している。音楽表現活動実践時は、保育者自らが音楽環境としての一翼を担いつつ、指導力を駆使して活動を展開している。子どもと教材、活動の在り方、子どもをとりまく時空を含めた環境との関連に配慮しながら教育・保育実践し、ねらい達成のための具体的かつ効果的な活動の在り方を日々の保育で探りながら、それらの関係を目の当たりに受け止めている現職保育者に、音楽表現活動とねらいとの関連を問うことは、ねらいの浸透と達成を知る最も有益な方法の一つといえよう。

調査の内容として、アンケートに教材と活動の効果を明らかにするための質問項目を設定した。音楽表現活動において教材のもつ役割は多く、教材そのものが学習内容である場合、学習内容を含む場合、また媒体・媒介としての機能をもつ⁵⁾。そこで、幼稚園教育要領・保育所保育指針に示されるねらいが、日常の保育で保育者にどのように意識され達成しようとしているかを知るために、日常の保育で用いている教材を軸に置いたアンケートを作成した。あわせて「保育者」自身の保育歴など音楽表現活動の主体としての属性についても質問した。

<アンケートの対象と回答数>

山口市・防府市の公私立、規模の大小を網羅した幼稚園・保育所をアンケート対象とした。実施した公私別幼稚園・保育所数と、保育者数及び保育者の性別と保育歴を表1に示す。

<アンケート実施時期>

平成20年(2008)10～11月に実施、12月初旬に回収を完了した。

<アンケート内容>

日々用いている音楽教材の記述、及び記述した個々の教材について、幼稚園教育要領の表現領域の3項目のキーワード「感性」「表現」「イメージ」のいずれをねらいとしたか、またそれらの達成度を4段階で問う。1つの教材を異なった年齢で用いる場合、各年齢でそれぞれ別にねらい

を記述するよう求めた。そして教材を展開した子どもの対象年齢、活動月、活動内容、活動場면을調査項目とした。さらに教材を選択する時の動機、教材の重視する音楽的観点、及び保育者の特性（年齢、経験年数、性別、音楽表現の自己評価など）を調査項目に加えた。本研究に関わる具体的なアンケートの質問項目、及び内容を文末資料1に示す。

<具体的な方法>

まず山口市内の幼稚園で予備調査を行った。その後、山口・防府市内の表1に示す幼稚園・保育所の各園長にアンケート目的を説明し理解を得た上で、アンケート用紙を園へ持参し、回答についての詳細を説明した。園長に回答人数と保育者を一任し、1ヶ月後を回収の目安として依頼した。

3. 結果と分析

幼児教育現場での音楽教材の選択は、小学校とは異なり、個々の園や保育者に全面的に委ねられている。本研究では保育者が日常の保育で採用している教材について曲名を問い、各曲に対するねらいの設定と達成度、及び音楽表現活動の構成要素について回答を得た。曲数を指定せず、教材記入欄を29行設けたところ、161名の保育者から最多64曲、最少3曲、平均23曲、のべ3,740の教材を得た。

記述された教材個々について、ねらいの設定とその達成度、そしてねらいの設定・達成と子どもの発達、及び活動の内容、時空との関連を検討する。さらに、多くの保育者が採用している教材に注目し、そのねらい設定と達成度との関連を通して、ねらいを達成するための効果的な音楽表現指導の在り方を検討する。

1) 教材とねらい

表1. アンケート対象園数・回答者数・回答者の保育経験

幼・保	公・私	施設数	回答者の人数				回答者の保育経験					
			女性	男性	不明	合計	1年未満	2~3年	4~6年	7~10年	11~20年	21年以上
幼稚園	公立	2	4	0	0	4	0	1	1	0	0	2
	私立	8	52	0	0	52	7	13	9	12	9	2
保育所	公立	4	22	1	3	26	1	6	0	3	2	11
	私立	10	68	5	4	77	7	7	13	19	18	9
その他	-	-	2	0	0	2	0	0	0	2	0	0
合計		24	148	6	7	161	8	13	13	24	20	20

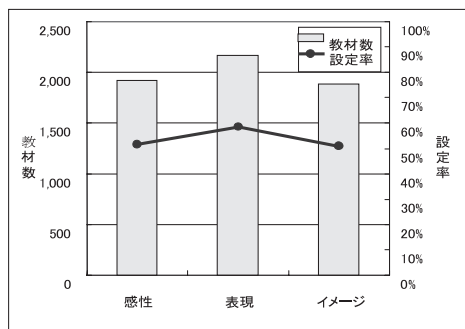
161名の保育者から得た教材の種類は609曲であり、最も多くの保育者が採用した教材は「こいのぼり」で107名であった。1名だけが採用した教材は297曲あり、本調査で得た教材数のほぼ半数を占めた。

(1) 教材とねらい設定

1教材に複数のねらいが設定される場合を考え、複数回答可として調査した。ねらいごとの教材数と設定率、及びねらいの達成度を検討する。「感性」「表現」「イメージ」の各ねらいについて、教材数と設定率を表2に示す。またねらいごとの教材数を棒グラフ、設定率を折れ線でグラフ1に示す。

表2. ねらい別教材数と設定率

ねらい	感性	表現	イメージ
教材数	1,915	2,116	1,883
設定率	52%	58%	51%



グラフ1. ねらい別設定数と設定率

3つのねらいを比較すると「表現」が多く、「感性」「イメージ」がほぼ同程度で、いずれものべ約2,000の教材が設定されていた。ねらいの設定率はいずれも総教材数の50%以上を占め、3つのねらいはほぼ平均的に設定されていた。また音楽活動を展開するにあたり、保育者はねらいを1教材に対し、平均1.6項目設定していた。

保育者は「…豊かな感性をもつ」「…自分なりに表現して楽しむ」「…イメージを豊かにし…」の3つのねらいを、成長著しい0～6歳の乳幼児期に対して大きな偏りは無く平均的に設定しており、ねらいの浸透は達成できているといえる。

(2) ねらい別の達成度

保育者が教材に対して設定したねらいの達成度について、どのように認識しているのかを「7割以上の子どもが達成」「4～6割の子どもが達成」「3割以下の子どもが達成」「ほとんどの子どもができない」の4段階で質問した。その結果、「ほとんどの子どもができない」は皆無であった。他の3つの達成ランクの教材数と率を表3に示す。

3段階の達成ランクは、「感性」「表現」「イメージ」のいずれも、最も高いランクの「7割以上」

表3. ねらい別達成ランクの教材数と%

ねらい	感性	表現	イメージ	合計
7割以上 教材数(%)	1,327 (69%)	1,432 (66%)	1,203 (65%)	3,962 (65%)
4～6割 教材数(%)	535 (28%)	688 (32%)	604 (33%)	1,827 (33%)
3割以下 教材数(%)	53 (3%)	46 (2%)	41 (2%)	140 (2%)
合計	1,915 (32%)	2,166 (37%)	1,848 (31%)	5,929 (100%)

注. (%)は縦罫で100% (ただし2重線で囲んだ合計欄は横罫で100%)

が65%以上、「4～6割」が30%程度と、この2つの上位達成ランクが大半を占め、「3割以下」は2～3%以下と僅かであった。全体の傾向としては音楽表現活動の達成について肯定的に捉えており、有効性があるといえる。

2) 構成要素とねらいの設定・達成

前項で、ねらいの浸透と有効性について、評価できる結果が得られた。その詳細、つまりねらいは具体的にどのように浸透し、どのように有効であるのかをみていくことは、より効果的な教材の活用を模索する上で意義あることと考え、ねらいの設定・達成と、音楽表現活動の構成要素との関連をみていく。本稿では、主体である「子ども」については年齢と表現的側面を、「活動」では時間的側面と空間的側面との関連について検討する。

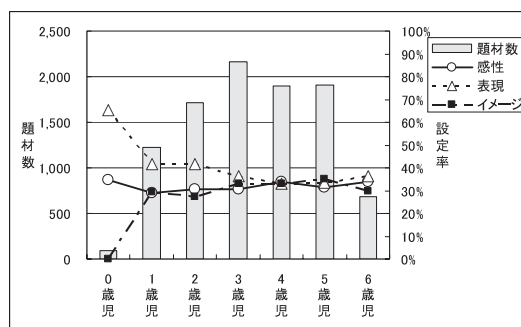
(1) 対象年齢とねらいの設定・達成

子どもの発達の大きな指標となる対象年齢とねらいの設定、またその達成との関連について検

表 4. ねらい別対象年齢の教材数と%

対象年齢	感性	表現	イメージ	合計
0 歳児	31 (35%)	58 (65%)	0 (0%)	89 (1%)
1 歳児	353 (29%)	512 (42%)	361 (29%)	1,226 (13%)
2 歳児	527 (31%)	715 (42%)	472 (28%)	1,714 (18%)
3 歳児	666 (31%)	782 (36%)	715 (33%)	2,163 (22%)
4 歳児	641 (34%)	629 (33%)	625 (33%)	1,895 (20%)
5 歳児	596 (31%)	639 (34%)	670 (35%)	1,905 (20%)
6 歳児	230 (34%)	248 (37%)	201 (30%)	679 (7%)
合計	3,044 (31%)	3,583 (37%)	3,044 (31%)	9,671 (100%)

注. 横罫で 100% (2 重線で囲んだ合計欄は縦罫で 100%)



グラフ 2. 対象年齢別の教材数とねらい設定率

興味・関心の拡がりに合わせ、保育者がその時々に応じた新たな教材を子どもたちに提供していると推測できる。また、一つの教材を異年齢でも繰り返し採用し、これが教材数増加につながっていると推測できる。

4 歳以降では教材数が減少した。これは、一つの教材を子どもの表現力の発達に合わせて、あるいは発達を促すために、さまざまな活動で何回も繰り返し展開するためではなかろうか。加えて、音楽的にも言語的にも内容が豊富になる教材を楽しむには時間がかかること、また保育者が子どもたちの表現力のレベルアップを試み、表現としての完成度を高めようとしていることなども、教材数減少の一因と考えられる。

0 歳では音楽教材数が少なかった。これは調査が年度の間時であるためであろう。あるいは用いる音楽教材が少ないという実態があるとすれば、その実態は子どもにとって必要性を充分満たしている結果なのか、あるいは充分であるよう教材開発の検討が必要なのか、より詳細な調査が必要である。

ii) ねらいの設定率

一定の教材数が確保できた 1～5 歳児のねらい設定率は、1 歳児で低いものの、2～5 歳児では 20% 前後の安定した結果であった。概して低年齢児で「表現」が高く、「イメージ」は低い傾向がみられた。そして、3つのねらいの設定率は 3 歳児で接近していた。ねらい別にみると、「感性」は各年齢ともに 30% 台で推移、「イメージ」は 0 から 1 歳児で大きく増加し 5 歳児まで緩やかな上昇傾向、「表現」は 3つのねらいの中で常に設定率は高く、特に低年齢では占める率が高いなど、

討する。アンケート実施は 10～11 月の年度途中であり、子どもの年齢は 0 歳から 6 歳 8 ヶ月と幅広い。0 歳と 6 歳の教材数は 1～5 歳より少ないものの、省かずデータとして掲載し、1～5 歳とはデータ数に差があることに配慮して考察する。

① 対象年齢別にみる教材数とねらい設定の関係

3つのねらいごとに 0～6 歳の年齢別教材数と設定率、及び二重線内に各年齢の総教材数と設定率を表 4 に示す。また年齢ごとの教材数を棒グラフ、3つのねらいの設定率を折れ線でグラフ 2 に示す。

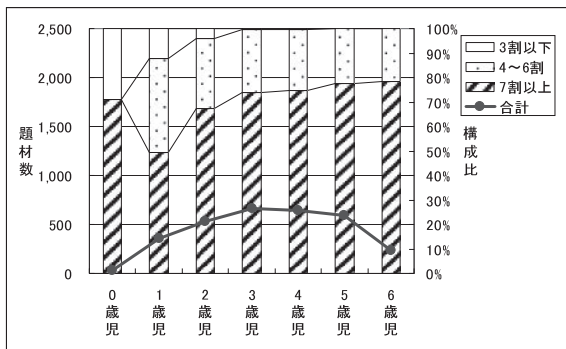
i) 教材数

全体的な傾向として、3 歳までは音楽教材数が飛躍的に増加し、4, 5 歳では若干減少した。3 歳までの大きな教材数の増加は、子どもの心身の発達に伴う興味・関心の拡がりに合わせ、保育者がその時々に応じた新たな教材を子どもたちに提供していると推測できる。

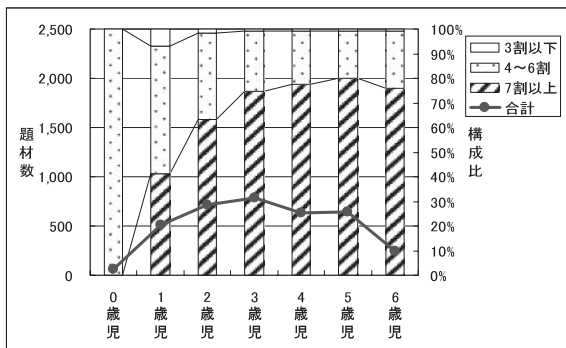
3つのねらいの設定率にはそれぞれ異なった傾向がみられた。0歳児で「イメージ」をねらいとした教材が皆無であり、161名の保育者が1教材も採用していないのは、イメージ力をねらいとすることそのものが0歳児では困難であることが推測される。0～6歳までをトータルにみると、3つのねらいは平均的に設定されているが、3歳未満児と3歳以上児ではねらいの設定や達成の在り方は異なり、子どもの成長と深く関わっている。ねらい設定の面から、3歳未満児・3歳以上児という括りは、子どもの成長の一つの節目であることを示している。

② ねらい別対象年齢の達成度

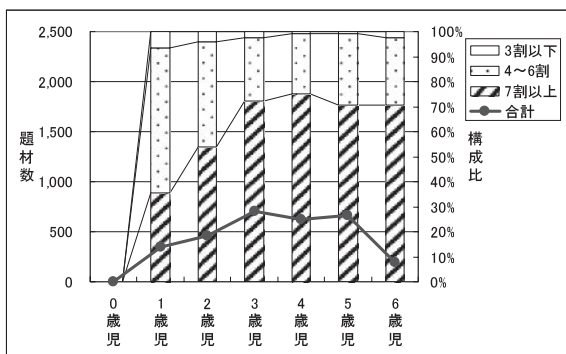
3つのねらいごとに、年齢別の教材数の合計を折れ線グラフで、達成ランクの構成比を「7割以上」斜線、「4～6割」点、「3割以下」白の棒グラフでグラフ3～5に示す。



グラフ3. 年齢別の「感性」達成度



グラフ4. 年齢別の「表現」達成度



グラフ5. 年齢別の「イメージ」達成度

a. 感性

グラフ3より、「7割以上」の高い達成ランクが3歳まで大きく増加した。3歳以降は70～80%で緩やかな上昇がみられ、「3割以下」の低い達成度は3歳以上ではほとんど無かった。「豊かな感性をもつ」のねらいは、3歳までは大きく、それ以降はゆるやかに達成できている。

0歳でも少ないながら「感性」をねらいとした教材が採用され、しかも高い達成ランクが7割に達していた。感性は子どもの成長の早期よりねらいとして設定でき、成果が期待できる。

b. 表現

グラフ4より、表現の年齢別達成度は、感性の場合と同傾向であった。ただし、0歳児では高い達成ランクはみられず、「4～6割」達成ランクだけだった。表現力の養成をねらいとして活動を展開しているものの、0歳児の子どもの表現に、明確な成果として捉えることができなかったからであろう。しかしながら本調査の約1/3の保育者が、0歳児に「表現」をねらいとして教材を設定し、子どもに表現方法を具体的に示し、同調を促し意欲づけることは、表現力育成に必要な不可欠のことと評価できる。

表現するには、表現に必要な身体の器官の成長と、使いこなすための機能的な発達の両

側面が必要である。グラフ4にみる達成ランクの在り方は、表現力の前提となる器官・機能の成長や発達が大い、乳幼児期独特の表現力発達の様子を明確に捉えることができる。

3歳以降の器官・機能の成長や発達の在り方は、それまで同様に大きく変化しているにもかかわらず、保育者の達成ランクは比較的一定していた。これは、保育者が達成感を保育へ活かす方法に変化があるためではなかろうか。3歳未満と3歳以上では保育者一人が担当する子どもの人数は大きく変化する。そこで保育者は、達成感が「7割以上」達成ランクを70～80%で維持しつつ、子どもが興味・関心をもち楽しく活動できるよう活動を構成・展開しながら、個性ある子ども個々の表現を支える身体の器官・機能の発達を目指し、教材選択を含むさまざまな内容と活動を展開するための目安としているのではなかろうか。

c. イメージ

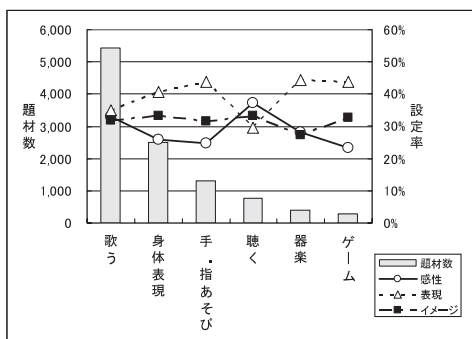
グラフ5より、3歳までは他のねらいと同様に高い達成ランクの率は20%前後の大きな伸びがあり、その後は70%台で推移した。3歳以降のイメージ力の成長は、経験の増加と共に大きく成長していると予測されるが、達成ランクの上昇には結びついていない。表現の場合と同様に、保育者のねらい達成感の保育への活かし方が3歳以降では異なっていると推測する。

子どもの発達とねらいの設定・達成との関連を通して、保育者が0歳児でイメージをねらいとしていないことがわかった。イメージするにはそれ以前に「見る」「記憶する」こと、そして記憶を「思い出す」ことが関係している⁶⁾。そのいずれの経験も少ない0歳では「イメージ」をねらいとすることそのものが困難なものと推測できる。この時期には、あそばせうたなどによる多

表5. ねらい別活動内容の教材数と%

活動内容	感性	表現	イメージ	合計
歌う	1,788 (33%)	1,905 (35%)	1,736 (32%)	5,429 (51%)
身体表現	650 (26%)	1,018 (41%)	835 (33%)	2,503 (23%)
手・指あそび	328 (25%)	577 (44%)	416 (31%)	1,321 (12%)
聴く	281 (37%)	224 (30%)	251 (33%)	756 (7%)
楽器あそび	110 (28%)	173 (44%)	107 (27%)	390 (4%)
ゲーム	69 (23%)	130 (44%)	97 (33%)	296 (3%)
合計	3,226 (30%)	4,027 (38%)	3,442 (32%)	10,695 (100%)

注. (%)は横罫で100%。ただし2重線で囲んだ合計欄は縦罫で100%



グラフ6. 活動内容別の教材数と3つのねらい設定率

くの音楽表現活動を、楽しさや喜びを豊かに感じながら体験を重ねながら「感性」「表現」を育てることが、イメージ力の育成に関わると思われる。そして3歳を迎えた時に、3つのねらいが共に足並みを揃えて達成できていくものと考えられる。

(2) 活動内容とねらいの設定・達成

子どもの表現的側面として「歌う」「身体表現」「手・指あそび」「聴く」「楽器あそび」「ゲーム性のあるあそび」の6つの活動内容をあげ、ねらいの設定と達成との関連を検討する。

① 活動内容別教材数とねらい設定

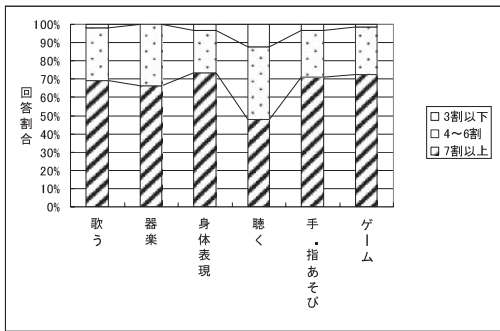
ねらい別活動内容の教材数と設定率、二重線内に3つのねらいの合計教材数とその設定率を表5に示す。また活動ごとの教材数を棒グラフ、

ねらいの設定率を折れ線でグラフ6に示す。

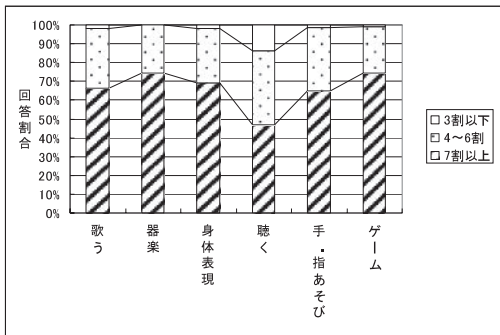
i) 教材数

一つの教材に複数のねらいを設定しているため、表5の「歌う」活動の合計数が総教材数3,740を上回った。いずれのねらいにおいても、総教材数の約半数に「歌う」活動が採用されており、3つのねらい達成に「歌う」活動は必須であるといえよう。

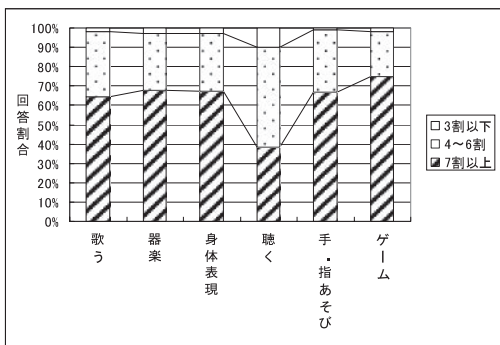
次いで「身体表現」が多く、のべ教材数の1/4の教材で取り上げられていた。特に「表現」をねらいとした率が高く、幼児期の子どもが身体表現を通して3つのねらいを達成している。そして「手・指遊び」「聴く」「楽器あそび」「ゲーム」と続いた。「楽器あそび」は予想より少なかった。子どもの演奏技能が求められることや楽器を必要とすることなどが、活動を抑制しているのであろうか。「ゲーム性のあるあそび」はルールの理解と役割の認識・遂行、また知的理解と社会性の発達が必要であり、それらの理由により、幼児期には少ないものと推測できる。



グラフ7. 活動内容別の「感性」達成度



グラフ8. 活動内容別の「表現」達成度



グラフ9. 活動内容別の「イメージ」達成度

ii) ねらいの設定率

ねらいごとに活動内容の傾向をみると、「歌う」「聴く」では3つのねらいの設定率が接近していた。また「聴く」は、唯一「感性」をねらいとする率が最も高かった。「身体表現」「手・指あそび」「楽器あそび」「ゲーム」では「表現」をねらいとする率が高く、次いで「イメージ」となっていた。「歌う」「聴く」活動は3つのねらい達成に大きく関わり、また他の活動は身体活動を伴うものは表現がねらいとして設定される場合が多い。そして「ゲーム」のねらいの達成に特徴的な差があることがわかった。

② ねらい別活動内容の達成度

3つのねらいについて、各活動の達成ランクの構成比を棒グラフで「感性」グラフ7、「表現」グラフ8、「イメージ」グラフ9に示す。

3つのねらいの達成度の傾向はほぼ共通しており「歌う」「器楽」「身体表現」「手・指あそび」「ゲーム」は、高い達成ランクがおよそ70%と高い。一方、「聴く」は40%前後と他の活動と比べて低い。その理由について考えたい。

ここで改めて保育者の達成度判断のための観点や基準を推測する。観点は子どもたちの表情、子どもたちの活動の様子、子ども同士の関わり合い、他の活動への反映などが考えられる。基準は表情や活動の在り方、関わり合いの度合いなどが考え

られる。「聴く」活動の達成を判断するための子どもの表情、他児との関わりなどの観点は、他の活動と比べると捉えにくく、従って基準も見分けるのが困難なのではないかと思われる。極端な例として、子どもは保育者の歌唱表現など音源を背にしながら聴く場面もある。従って「聴く」活動における達成については、その評価を保育者が見極めることが困難なのではないか、そのために達成率が低い結果となったのではないだろうか。

さらに「聴く」活動について検討する。音楽活動において、聴く活動は最も基本であり、かつ欠かせない活動なのではなかろうか。聴くことによって子どもの歌う活動を促し、音楽刺激にあわせて身体活動や手遊びをする。音楽を伴う遊びでは、聴くことが前提としてあり、他の活動のベースとして常に内在する。他の活動の達成度が、高い達成ランク70%を占めているながら、「聴く」活動の達成度が低いのは、保育者が子どもたちの「聴く」状態を認識する意識が薄く、従って達成度にも表われないのではなかろうか。保育者は、子どもが「聴く」という活動を多くの場面で行っているという意識を、もっと持つべきなのではなかろうか。あるいは、子どもたちが実際に聴く活動を苦手としているのか、今後の課題としたい。

活動内容とねらいの関連を通して、音楽活動における歌う活動の位置づけが大きいことが確認できた。子どもにとって表現が容易な歌唱を通して、リズム感などの音楽的諸要素を身につけ、他の音楽活動、あるいはまた歌う活動と他の音楽活動を同時に展開しながらねらいを達成していると推測できる。一方、保育者の「聴く」活動の設定率、達成度が低い結果が得られた。「聴く」活動は音楽活動のベースとしてどのような場合にも存在することから、この結果には疑問を感じた。保育者は子どもの「聴く」活動に対して意識を高める必要があり、保育者の子どもへのはたらきかけにも配慮が必要ではないかと考える。

(3) 活動月とねらいの設定・達成

表6. ねらい別活動月の教材数と%

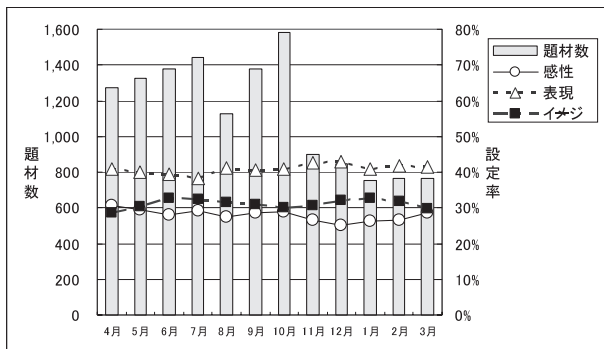
活動月	感性	表現	イメージ	合計
4月	388 (31%)	520 (41%)	363 (29%)	1,271 (9%)
5月	391 (30%)	531 (40%)	402 (30%)	1,324 (10%)
6月	385 (28%)	541 (39%)	451 (33%)	1,377 (10%)
7月	423 (29%)	552 (38%)	470 (33%)	1,445 (11%)
8月	308 (27%)	463 (41%)	354 (31%)	1,125 (8%)
9月	394 (29%)	559 (40%)	428 (31%)	1,381 (10%)
10月	459 (29%)	647 (41%)	476 (30%)	1,582 (12%)
11月	240 (27%)	384 (43%)	277 (31%)	901 (7%)
12月	212 (25%)	363 (43%)	271 (32%)	846 (6%)
1月	199 (26%)	309 (41%)	247 (33%)	755 (6%)
2月	203 (27%)	320 (42%)	243 (32%)	766 (6%)
3月	219 (29%)	317 (42%)	227 (30%)	763 (6%)
合計	3,821 (28%)	5,506 (41%)	4,209 (31%)	13,536 (100%)

注. ()の%は横罫で100% ただし二重線で囲んだ合計欄は縦罫で100%

1年間の四季の移ろいと共に自然の変化や生活の変化、それに伴うさまざまな行事があり、子どもたちはこれらの大きな環境に影響を受けながら育つ。活動の時間的側面の一つとして、月別にねらい設定と達成との関連について検討する。

① 活動月別教材数とねらい設定

ねらい別に12ヶ月の教材数と設定率、及び二重線内に3つのねらいの合計教材数と設定率を表6に示す。また月ごとの教材数を棒グラフ、3つのねらいの設定率を折れ線でグラフ10に示す。



グラフ 10. 活動月別の教材数とねらい設定率

8月の減少は幼稚園が夏休み期のためであろう。また、9月が7月より少ないのは運動会等の準備の影響が推測できる。仮に7月と10月の教材数を直線で繋ぐと、およそ月50曲の増加ペースで4月から10月へ向けて増加している。一方、10月までと11月以降とで教材数の動きが大きく異なり、音楽活動の在り方に大きな変化があると推測できる。年度の前半である10月までの時期は、環境の変化に応じた子どもの興味・関心にあわせて、さまざまな教材を設定、展開しているのではなかろうか。多くの教材を、それぞれの教材に適した活動を仕組むことによって、3つのねらいを達成しようとしていると推測できる。前半に対して、後半の11月以降は音楽発表会、クリスマス会、劇発表会、お別れ会などの行事が目白押しの状況である。教材数が少ないのは、それらの行事に関わる音楽的活動を契機として、一定の教材を焦点化してねらいを達成していると推測できる。

ii) ねらいの設定率

ねらい別にみると、「表現」は40%前後を占め、すべての月において3つのねらいの中で表現の設定率が常に多かった。教材数が減少する11月以降の後半は、わずかに率が高くなっていた。「感性」と「イメージ」は月によって多少の差はあるものの、ほぼ同程度で推移していた。

② ねらい別活動月の達成度

3つのねらいについて、活動月ごとに達成ランクの構成比を棒グラフ、教材数を折れ線でグラフ11～13に示す。

a. 感性

ねらい「感性」の月別達成度をグラフ11に示す。教材数が10月の最多と1月の最小を比較すると2倍以上差があるものの、達成の度合いや率の変動は少なく、「感性」の達成度は、教材の数との関連は少ない。最も高い達成ランクが占める率は、3つのねらいの中で最も高かった。達成度が高いのは3月である。3月は子どもを取り巻く人的環境の変化があること、また草花など自然界の変化も一因となっていることが推測できる。

b. 表現

ねらい「表現」の活動月別達成度をグラフ12に示す。教材数は3つのねらいの中で最も多かった。また、「感性」と同様に教材数の変化とねらいの達成には関連が見られない。4月と10～12月が若干高く、1～3月は低かった。4月は新年度で、前年度から一段階高い表現課題をもち保

i) 教材数

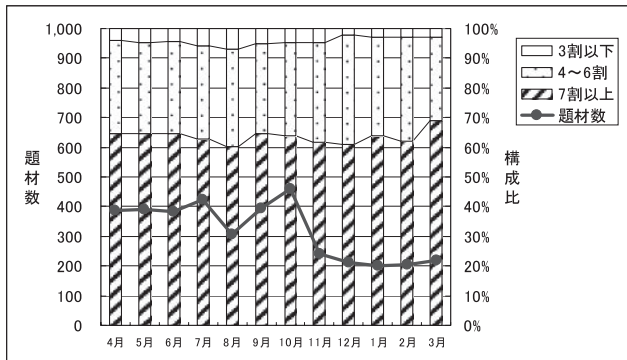
グラフ10の教材数の変化をみると、7月と10月を頂点とする2つの山ができた。4月から7月は月ごとに約50曲程度のなだらかな増加傾向があり、8月に減少した後、10月にかけては月ごとに200曲を越える急激な増加がみられた。10月から11月では600曲の大きな減少があり、その後は800曲前後で推移していた。

育者が指導するために表われたのではなかろうか。表現をねらいとする10月の教材数は約650曲と多い。これは運動会の後は音楽発表会やクリスマス会などの場で発表の場が設けられることが多く、音楽的活動が盛んになると推測できる。

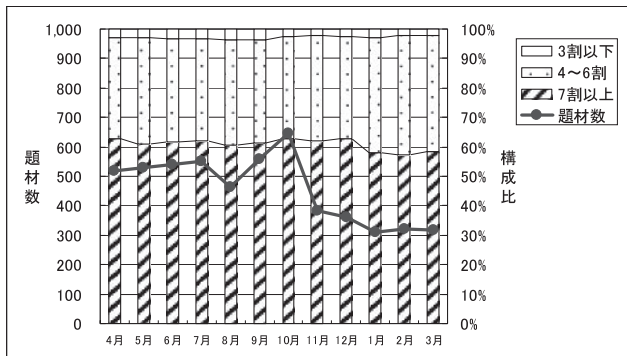
教材数に大きな変化があるにもかかわらず、達成度は4月から12月にかけて安定的な状態で推移していた。これは保育者が生活や行事などに応じた教材を選択し、子どもの興味・関心に応じ、子どもが主体的に関わるよう、保育者が子どもの成長・発達とのバランスをとりながら音楽表現活動を展開していることによると思われる。

c. イメージ

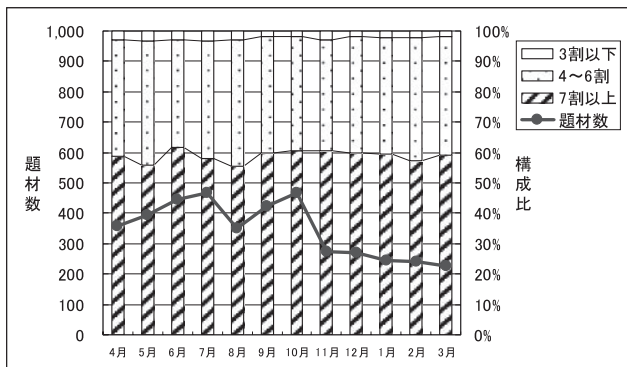
ねらい「イメージ」の活動月別達成度をグラフ13に示す。達成度が低いランクの「3割以下」



グラフ11. 月別の「感性」達成度



グラフ12. 月別の「表現」達成度



グラフ13. 月別の「イメージ」達成度

が占める割合は、3つのねらいの中で最も少ない。7割以上の高い達成率は月により変化があった。その変化と教材数を比較すると、教材数が多くなっていても高い達成度は減少、また教材数が下降している場合に達成度が高くなっているという、教材数と高い達成の割合が反比例している場合がみられた。子どもにイメージ力をもたせるには、一つの教材に対して時間をかけ、回数を多く経験していく必要が、他のねらいより多く求められるのだろうか。

月単位での教材数の変化から、子どもの興味関心に合わせて多種の教材に接する時期と、一定の教材を設定し繰り返す時期があると推測した。つまり3つのねらいは、多くの教材に接する時期と、一定の教材を繰り返す時期という、1年間を2つに分けた大きなサイクルによって達成されている。そしてそのサイクルが年単位で繰り返されることは、ねらい達成に効果をもたらす大きな周期でのスパイラルの形成となり、幼稚園や保育所という明確なカリキュラムをもつ環境によってこそ、ねらいが達成できているのではなかろうか。

(4) 活動場面とねらいの設定・達成

活動の空間的側面として「朝・夕（帰り）の会」「設定保育」「自由遊び」「行事」「誕生会」「その他」の6項目をあげ、ねらいの設定と達成との関連について検討する。

① 活動場面別教材数とねらい設定

ねらい別に活動場面の教材数と設定率、及び二重線内に3つのねらいの合計と率を表7に示す。また活動場面ごとの教材数を棒グラフで、3つのねらいの設定率を折れ線でグラフ14に示す。

i) 教材数

朝・夕（帰り）の会での教材数が5,230曲あり、他の場面の中で最も多く、かつ1/2を占めていた。子どもたちの園生活の中で、朝と帰りの集まりが、集団生活の単なる慣習の場にとどまらないことを意味している。子どもと保育者、子どもたちが共に時と場を共有できる喜びや、一日を楽しく過ごそうという意識や意欲づけなど、さまざまな目的をもち、そこで感情や意欲の共有のために、歌唱や身体での表現活動が大きな役割を果たしているといえよう。また保育者はそれが表現活動のねらい達成につながっていると捉えている。設定数の多さから、教材の定着につながっていると推測できる。

次いで設定保育の場が多い。設定保育では、カリキュラムに沿って目標やねらい、活動の展開等を計画的に実施する。その意味では設定保育が小学校以上の各教科の学習時間に相当するが、乳幼児期では設定保育だけでなく、生活のすべてが子どもの成長の場であることが確認できた。

ii) ねらいの設定率

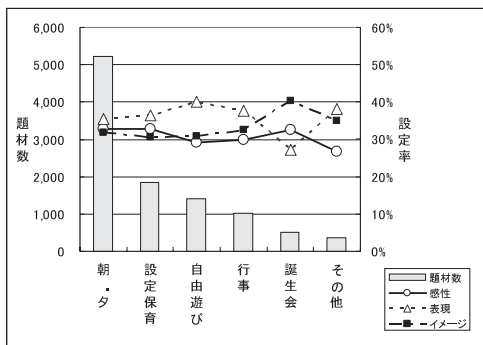
ねらいの在り方はいずれの場面においても「表現」が多く、「感性」「イメージ」がほぼ同じ程度であった。特に「自由遊び」では表現が多く、子どもたちの表現力の育ちを、「設定保育」の場だけでなく機会を捉えてはあそびの中で意図しながら活動しているといえる。

「誕生会」だけは「イメージ」の割合が高い。誕生日を迎えること、また親族の喜びや友だちが互いに喜び合うという展開に音楽活動が有効と推測できる。「その他」の行事は「遠足」「運動会」「発表会」等であろう。そこでは表現とイメージが強く、「行事」に際しての表現力の提示や行事に対する子どもたちの思いを印象づけようとしていることが推測できる。

表7. ねらい別活動場面の教材数と%

活動場面	感性	表現	イメージ	合計
朝・夕	1,710 (33%)	1,860 (36%)	1,660 (32%)	5,230 (50%)
設定保育	605 (33%)	670 (36%)	565 (31%)	1,840 (18%)
自由遊び	409 (29%)	562 (40%)	432 (31%)	1,403 (14%)
行事	309 (30%)	387 (38%)	335 (32%)	1,031 (10%)
誕生会	166 (32%)	139 (27%)	206 (40%)	511 (5%)
その他	96 (27%)	137 (38%)	126 (35%)	359 (3%)
合計	3,295 (32%)	3,755 (36%)	3,324 (32%)	10,374 (100%)

注. ()の%は横罫で100% ただし2重線で囲んだ合計欄は縦罫で100%



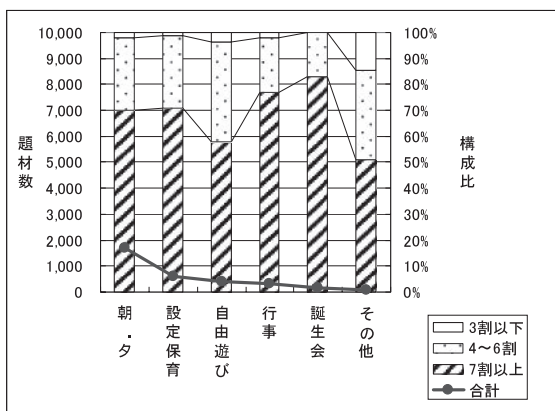
グラフ14. 活動場面別の教材数とねらい設定率

② ねらい別活動内容の達成度

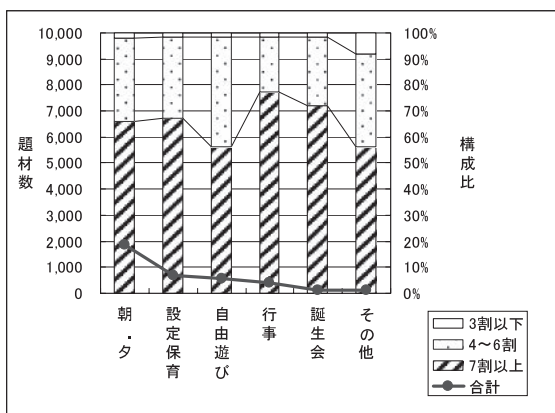
3つのねらいについて、各場面ごとの達成ランクの構成比を棒グラフ、教材数を折れ線でグラフ15～17に示す。

a. 感性

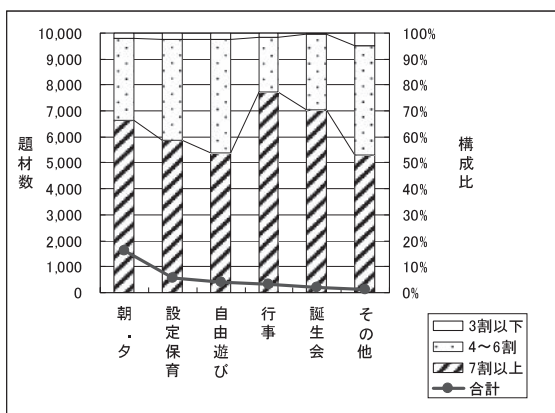
「感性」の活動場面別達成度をグラフ15に示す。すべての活動場面で「7割以上」の高い達成ランクが50%を越えていた。特に誕生会・行事で高い達成レベルの率が高く、子どもが捉えやすく理解しやすい機会を捉え、感性に訴えているものと思われる。「朝・お帰りの会」は「設定保育」とほぼ同率の、高い達成率が7割に近い、予想を上回る達成状況である。「その他」で「3割以下」の低い達成率がみられるものの、他の場面では皆無に近く、どの場面においても保育者のねらいに対する達成感は得られているといえる。



グラフ15. 活動場面別の「感性」達成度



グラフ16. 活動場面別の「表現」達成度



グラフ17. 活動場面別の「イメージ」達成度

b. 表現

ねらい「表現」の活動月別達成度をグラフ16に示す。感性と比較すると、高い達成レベルが占める率は全体的に低い。高い達成レベルの率が最も高いのは「行事」、次いで「誕生会」である。子どもの意識を焦点化して表現活動を繰り返し、ねらいの達成を図ることができているのであろうか。

7割以上と4～6割の達成度を合わせると、「その他」以外の達成率は98%を占め、高い達成率になっている。乳幼児期の子どもはいわゆる学びの場ともいえる「設定保育」だけでなく、さまざまな場面での音楽表現活動を通して表現力を身につけているといえる。

c. イメージ

ねらい「イメージ」の活動月別達成度をグラフ17に示す。「行事」「誕生会」「朝・お帰りの会」の順に、高い達成ランクが70%前後を占める。行事や誕生会は、音楽活動の意図が焦点化されると推測できる。また「朝・お帰りの会」は表現力と共に、みんなで一緒に時と場を共有できることを喜び、音楽表現活動を楽しむ等、イメージの共有を目指して

いと推測できる。「設定保育」では「イメージ」の高い達成ランクの率は「感性」「表現」と比較して最も少ない。

保育者養成機関での学びでは、設定保育への注目度が高い。しかし、本調査のねらいとその達成の様子から、「朝・お帰りの会」の場が音楽活動に大きな役割を果たしていると推測できる。時間の区切りによって学ぶ内容を展開できる小学校以上の子どもの育ちと、乳幼児期の子どもの育ちとの大きな差を捉えることができた。乳幼児期では、大人が設定し意図した時間・空間でのみ成長・発達するのではなく、さまざまな時空での経験によってねらいを達成し得ると思われる。音楽表現活動のより高い達成を目指すために、保育者の表現の在り方と表現活動のための環境設定について、より大きな捉え方が必要となるのではなからうか。

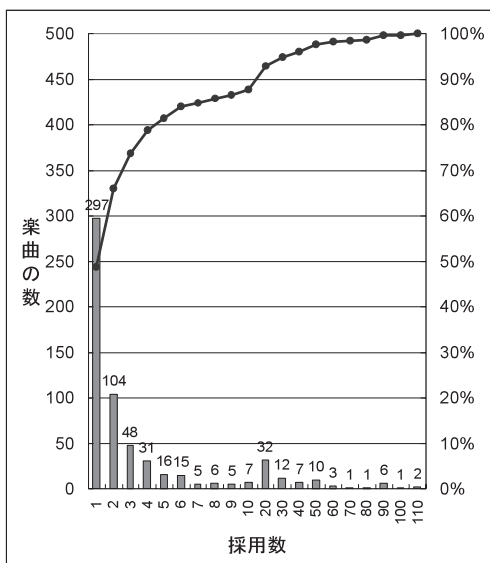
3) 多用教材

幼稚園・保育所の多くの保育者が音楽表現活動で採用した教材について検討する。

小・中学校では共通教材が定められており、いくつかの出版社によって編集された教科書が保育者にとって教材選択の拠り所となっている。幼稚園教育要領、保育所保育指針には具体的な音楽教材は示されず、教材の選択は園あるいは保育者個々に委ねられている。幼稚園・保育所の各園では園全体としてカリキュラムが定められていたり、同年齢クラスで部分的に共通の教材を用いたり、担当保育者に一任するなど選択の状況はさまざまである。アンケート回答保育者が、どのような選択権下にあったかを表8に示す。教材選択を全面的に任されている保育者が約66%、3/4程度が10%であり、8割近くが個々の保育者の選択に任されていた。この割合が平均的であるのか、本研究対象地域独特のものであるのかはわからない。

表 8. 教材の選択権

選択権	教材数	人数	(%)
全面的に任されている	2,525	106	65.8
3/4程度任されている	422	16	9.9
1/2程度任されている	193	8	5.0
1/4程度任されている	-	0	0.0
ほとんど決められている	74	3	1.9
その他	161	7	4.3
回答無し	365	21	13.0
合計	3,740	161	100



グラフ 18. 採用者数別教材数

教材は音楽表現活動のねらいによって、その時々々に機能を変える。野崎は「教材は教材として『あるもの』と、教材に『なるもの』がある…『教師が子どもを前にして、教材にいかにか教育的働きかけをもたせるか』という『教師の主体的な役割』が重視される。…」と述べ、教材の4つの機能として、教材がねらいの内容そのものである場合、内容を含む場合、発揮させ再構築させる内容をもった媒体となる場合、内容を伝える媒介となる場合をあげている⁷⁾。多用された教材について、保育者がそれらにどのような機能を求めたのかも、併せて検討する。

(1) 多用教材と採用度

161名の保育者が記載した教材数はのべ3,740曲であり、実教材数は609曲であった。グラフ18に、一つの教材を採用した人数をX軸、教材数をY軸、累計を折れ線グラフで示す。X軸右端の最も多い107名、101名の保育者が採用した教材は2曲、X軸のほぼ中央に位置する20名が採用した教材数は32曲であった。それ以下の人数によって採用された教材数は徐々に多くなり、1名の保育者が選択した教材は279曲と最も多かった。平均すると本調査対象の保育者1人につき2曲程度、独自の採用による教材があった。保育者は、他の保育者と共通の教材を採用すると同時に、積極的に新たな教材を選定し保育活動に活かしていることがわかった。

紙幅の制約上、21名以上の保育者が採用した43の教材を表9に示し、その採用者数、3つの

表9. 教材を選択した人数、ねらいごと7割以上達成の%及び活動内容の%

順位	教材	実採用者数	7割以上達成度の%			活動内容の%					
			感性	表現	イメージ	歌う	楽器あそび	身体表現	聴く	手指あそび	あるあそび
1	こいのぼり	107	81	67	66	93	5	33	7	7	0
2	どんぐりころころ	101	73	64	75	92	2	57	10	38	1
3	たなばたさま	91	63	57	50	97	3	8	15	8	0
4	とんぼのめがね	89	77	67	56	99	0	30	8	12	0
5	まつぼっくり	88	64	60	70	95	2	53	5	36	14
6	チューリップ	84	81	64	54	94	1	30	10	35	0
7	かえるの合唱	83	82	76	70	93	23	63	7	17	4
8	みずあそび	83	85	68	78	92	0	46	11	31	1
9	かたつむり	81	83	76	56	96	5	44	7	40	1
10	大きなりの木のしたで	73	67	70	64	88	3	77	10	38	5
11	ちょうちょ	62	59	67	43	97	2	50	13	31	2
12	こたりのうた	56	75	49	56	96	2	45	14	14	0
13	バスごっこ	56	74	81	79	95	7	86	7	9	7
14	やきいもグーティーパー	54	83	58	65	80	0	33	7	70	37
15	あわてん坊のサンタクロース	50	57	68	62	94	26	44	12	10	0
16	うみ	50	47	50	48	98	2	12	14	2	0
17	しゃぼんだま	49	68	50	55	94	2	20	24	2	0
18	とけいのうた	44	79	62	70	98	2	41	5	23	0
19	アイスクリーム	42	84	69	71	95	0	26	17	31	0
20	おつかいありさん	42	76	61	36	90	5	38	14	29	2
21	こおろぎ	42	64	50	78	100	10	19	7	7	0
22	せんせいとおともだち	42	62	83	62	95	2	64	10	7	5
23	まめまき	42	82	64	70	100	0	43	2	10	0
24	おばけなんてないさ	41	56	68	58	95	0	29	7	2	0
25	おかあさん	40	74	80	71	100	0	8	20	0	3
26	さんぽ	40	73	63	65	90	20	50	20	3	18

ねらいの「7割以上」の高い達成ランクが占める率、及び6つの活動内容が占める率を示す。80%以上を太字、30%未満を網掛けで表わす。

前項より、ねらいの設定及びその達成度の高さから、多くの保育者に採用されている教材は「生きる力を育む」ための教材として有益である可能性が高いといえる。

(2) 多用教材のねらいの達成度

表9に示した採用者数の多い教材は、高い達成ランクの占める率が、3つのねらいともにほぼ50%以上を占めていた。43曲中の各ねらいの平均は「感性」68%、「表現」63%、「イメージ」62%であり、多用され

る教材は、3つのねらいがいずれも高いレベルで達成されている。そして、3つのねらいの高い達成ランクの%の有り様は個々の教材によって異なることから、教材としての機能性は大変個人的であるといえよう。

採用者数の多い教材の、歌詞の特徴として、季節の変化を追って子どもの視覚に印象深く残り、子どもの身近にあって手や身体で触れることができるものが多い。従って保育者は子どもをとりまく環境を意識し、子どもの興味・関心に沿って教材を展開している。

これら各教材は言語的側面や音楽的側面、また活動への展開要素などの在り方が大変個人的であり、教材個々のこれらの要素が、ねらい達成とどのような関連にあるかの分析は継続課題としたい。また、多用される教材は、3つのねらいを達成できる要素を元来保持しているのか、あるいは多用する中で保育者がねらいをもつ可能性を広げることができたのか、あるいはまた、それらの相乗的な効果によるのかについての検討も継続課題としたい。

(3) 多用教材の活動内容

多用される教材の活動内容は、「歌う」欄は高い達成ランクがすべての教材で80%を越えていた。歌う活動が音楽活動の基本として位置づけられていることがわかる。「こおろぎ」「まめまき」「おかあさん」など「歌う」活動内容が100%の教材は、他の活動の率が低い傾向にあり、教材

の内容そのものがねらいと考えられる。

(表9の続き)

順位	教材	実採用者数	7割以上達成度の%			活動内容の%					
			感性	表現	イメージ	歌う	楽器あそび	身体表現	聴く	手指あそび	あるあそび
27	うれしいひなまつり	39	83	53	73	97	0	26	10	3	0
28	あめふりくまのこ	38	39	46	52	100	0	21	13	3	0
29	てをたたきましょう	38	50	79	80	87	16	84	5	37	0
30	おもちゃのチャチャチャ	37	60	70	71	95	57	54	14	19	3
31	むすんでひらいて	35	40	62	76	77	0	57	9	74	3
32	ありさんのおはなし	30	60	52	38	93	13	47	13	33	0
33	おおきなたいこ	28	67	65	50	79	36	50	11	36	0
34	お正月	28	55	73	65	100	4	7	14	0	0
35	たきび	28	63	67	60	96	4	25	14	4	0
36	めだかがっこう	27	55	33	54	93	0	15	7	0	0
37	ゆき	27	70	67	91	100	0	30	7	0	0
38	いぬのおまわりさん	25	36	56	17	96	16	40	24	8	0
39	うんどうかいのうた	24	80	72	82	96	0	33	4	29	0
40	やまのおんがくか	24	69	61	55	92	29	54	13	8	0
41	ゆうやけこやけ	21	67	67	43	95	0	5	14	14	0
42	思い出のアルバム	21	75	82	70	100	0	19	14	0	0
43	春が来た	21	74	33	63	100	0	19	10	5	0
平均			68	63	62	94	7	38	11	18	2

次いで身体表現活動に、高い達成ランクが30%をこえる教材が多かった。身体表現活動が乳幼児期の音楽そのものの、また音楽する楽しみの獲得に大きく関わることを示している。60%を越えた「バスごっこ」「てをたたきましょう」「大きなくりのきのしたで」「せんせいとおともだち」「かえるのがっしょう」は歌詞の内容が動きを誘い、また擬声語やリズムが子どもの身体の動きを誘発するものと思われる。

3番目に手・指あそびが多かった。高い率を示している「むすんでひらいて」「やきいもグーチーパー」は動きそのものを誘いかける歌詞の内容であり、音楽のもつ強制力と相まって子どものやる気や動きをダイレクトに引き出すよう働きかけ、音楽的な内容が効果的に結びつくことで子どもの心に響いていると思われる。

楽器あそびは「おもちゃのチャチャ」57%、次いで30%台に「おおきなたいこ」「きらきらぼし」などが続くものの、教材数は少なかった。楽器あそびの活動は、音色の豊かさや音域の広がり、アンサンブルを楽しむ等、多くの内容をもつ。しかし、楽器活動は歌唱や身体表現活動と比べると、子どもにとって表現のための技術が必要となる。また保育者にとって楽器あそびを展開するには、子どもの楽器あそびの経験や演奏能力など個々に合わせた指導力、また楽器の環境設定が必要となる。全体と個別指導の両方に対応しながら、興味・関心をクラス全体で共有し音を楽しむという、活動を構成し展開するための指導技術が必要となることが、楽器あそびの機会が少ない一因であると推測される。表9に掲載していない教材で、楽器あそびだけで用いられる「小さな世界」「きよしこの夜」などがあつた。子どもの演奏技術をなるべく軽減して音あそびを楽しむことができること、そして保育者に楽器あそびの適切な教材提供についての検討が必要である。

ゲーム性のあるあそびへの展開は15教材にみられ、「やきいもグーチーパー」37%が最多であり、次いで10%台に「さんぽ」「まつぼっくり」と少ない。ゲームあそびの成立には約束事や役割を理解し、友だちとは異なる活動を一人で担って活動できる社会性の発達が必要となることから、幼児期には少ないものと推測できる。

採用者数の多い教材は、まず、3つのねらいの設定率が高く、かつ達成度が高い。そして、歌う活動の他に身体表現や手遊びなど他の活動への展開の可能性をもち、教材として内容そのものとなる機能だけでなく、内容の媒介、また媒体としての機能も併せ持っている。また季節に関する内容や身近な題材をテーマとするなど、子どもの五感で受け止めやすい内容を含んでいる。これらの条件により、広い年齢域で教材を繰り返し楽しむことができ、子どもたちは繰り返し経験する中でねらいを達成している。

なお、多くの保育者が採用する教材がある一方で、約半数の教材は一人の保育者の採用によるものであり、保育者は教材選択にあたり、新たな試みを展開していることが窺えた。

結 論

少子高齢社会、核家族化、加えて経済危機の現代の社会状況にあつて、幼稚園や保育所への期待は近年益々高くなっている。保育者が役割を果たすための基本的な拠り所は幼稚園教育要領であり保育所保育指針である。平成20年に改定された領域「表現」のねらいは、従前から引き継いだ「…豊かな感性をもつ」「…表現を楽しむ」「…イメージを豊かに…」の3項目であり、この3つのねらいは「生きる力」を育むために欠くことのできない、表現領域に課された役割である。

本研究では、現職保育者が3つのねらいを音楽表現活動にどのように位置づけ、どのような達成感を得ているのかを調査することで、幼稚園教育要領・保育所保育指針の領域「表現」に示さ

れるねらいの浸透と有効性を検証することを目的とした。

まず幼稚園教育要領や保育所保育指針に示されているねらいへの意識を教材への設定率にみると、感性、表現、イメージは、それぞれ52%、58%、51%という結果となった。設定されたねらいに対する達成度が3割以下という不満足な結果が2～3%と少ないことから、保育者は音楽表現活動のねらいと教材の活用という点において、適切な選択を行い、効果を実感していることが分かった。

ねらいの浸透と有効性を具体的に捉えることは、教材の効果的な活用につながると考え、音楽活動の構成要素との関連をみたところ、保育者の教材選択の在り方について、同様な結果が対象年齢別のねらいの設定のし方にもあらわれている。すなわち、低年齢児が対象となる場合、ねらいとしては「表現」がより多く選択されていることから、単に教材の力に頼るのではなく、より効果的な教材を模索していることが読み取れる。達成度の在り方は3つのねらいにより個性的でありながら、高い達成ランク率が3歳までは大きく増加し、それ以降は70～80%を保った結果が得られ、達成度と対象年齢には高い依存性があるといえる。ただし、低年齢児で達成度が低い点については、さらなる改善の余地がないか検討が必要である。

「教材」の数に関しては、保育者1人あたり平均23曲が得られた。保育で採用している教材すべての記載を求めたのではないが、題材数と対象年齢との間に依存性がみられることから、少なくとも保育者は子どもの能力にあわせて適切な題材を選択していることが分かる。さらに題材数が少ない高年齢児の場合でも達成度の低下は見られないことから、題材数と達成度の間に明確な相関はなく、その点からは題材数の観点で不足があるとはいえない。

次に活動内容別に見た場合、聴く活動の設定数と達成度が低い点に注意が必要であることがわかった。保育者は子どもの「聴く」活動を、保育者自身の表現を含め、より幅広く捉えるべきではないかと考える。またねらいとして感性を設定されることが多いが、ねらいを設定することが困難なのか、あるいはCDなどメディアを活用した教材の工夫が必要なのか、さまざまな要因と対策が考えられる。

「教材」の題材数に不足はないが、低年齢児向けの教材数は少なく、保育者に対して適切な量の教材を提供できているのか注意が必要である。また教材としては低年齢児向けの教材の量、活動としては聴くことに関する教材の質および量が今後の課題として明らかとなった。

また月別の教材数をみると、意外にも依存性が高いことが分かった。扱われる教材数が少ない11月～3月の期間でも達成度が低下しないことは、より効果的な教材を考える上で参考となる。高年齢児向けの教材数が比較的少ないことと同様、単純に多数の教材があればよい、というわけではないことが明確となった。そして、教材の多い年度の前半と教材数の少ない後半において、いずれも高い達成レベルを維持していることから、教育方法の有り方に大きな周期のスパイラルが形成され、それがねらい達成の一翼を担っていると考えられる。

活動場面の分析結果で、誕生会で扱われる題材数が比較的少ないのに対して、達成度が最も高いのも、月別の場合と同様な結果であるといえる。また、設定保育だけでなく、子どもの生活全般で表現活動のねらいが達成されていることがわかった。

多用される「教材」とその特徴は、現職保育者の創意工夫の結晶ということができよう。この結果を現職保育者に提供していくことは、より効果的な音楽表現活動の実現に向けて必須である。また、保育者を目指す学生に対しても、どのような教材をどの程度持っていることが必要なのかを具体的に示す上で非常に有用な結果となった。

幼稚園教育要領・保育所保育指針の浸透は、意識される・されないにかかわらず半数の指導者が教材の使用目的として考えており、設定された目的の達成度は比較的高いと判断される。しかしながら、指導のポイントを明確にすることや、目的にあった質の教材を提供することは、より有効な音楽指導につながるであろう。保育者養成の段階から行ってゆきたい。

今後の課題として、教材に焦点をあて多用教材の特徴を詳細に分析するとともに、保育者自身の要素である「保育者の音楽表現能力に対する自己評価」及び「音楽表現活動への意欲」とねらいの設定の在り方、達成度との関連についてさらに検討を進めたい。

おわりに

本研究は山口市、防府市内の幼稚園、保育所の諸先生方のご協力をいただくことによって成し得ることができた。ご協力いただいた秋穂、えんしん、小郡、亀山、佐波、瑞祥、華城、東牟礼、平川、牟礼の各公・私立幼稚園、そして愛児園湯田、秋穂、阿知須、江泊、おおとり、勝間、上郷、新田、東牟礼、東山、みどり、向島、牟礼、山口第2の各公・私立保育所の園長先生、そしてご多忙中、膨大なアンケートにお答えいただいた161名の保育者の皆様に衷心より感謝申し上げます。またデータ集計にあたり協力を得た弟の山中秀峰に感謝します。

資料1. アンケート項目（本稿に関連する部分のみ簡略化して掲載）

<質問1> 4月から始まる1年間を振り返り、月々、季節や行事などで、音楽活動の題材を思い出しながら、具体的な題材について「曲名」「ねらい」「効果」「活動内容」「活動月」「対象児」「活動の場面」を、お答え下さい。各項目に示す記号の内容を下記に示します。

該当項目が複数の場合は、複数項目に○印、記述をお願いします。また、年齢によって、ねらいや達成が異なる場合は、別欄に記述してください。

題材	ねらい	達成	活動内容	活動月	対象児	場面
曲名	a.感性（いろいろなもの美しさなどに対する豊かな感性をもつ）	※	a. 歌う b. 器楽	a. 1月 b. 2月 c. 3月 d. 4月	a. 0歳児 b. 1歳児	a.朝、夕の集まり b.設定保育時
	b.表現（感じたことや考えたことを自分なりに表現して楽しむ）	※	c. 身体表現（手拍子を含む） d. 聴く	e. 5月 f. 6月 g. 7月 h. 8月	c. 2歳児 d. 3歳児	c.自由あそび d.誕生会
	c.イメージ（生活の中でイメージを豊かにし、様々な表現を楽しむ）	※	e. 手・指遊び f. ゲームを伴う	i. 9月 j.10月 k.11月 l.12月	e. 4歳児 f. 5歳児 g. 6歳児	e.行事 f. その他

※数字で記入（7割以上できた:3、4～6割できた:2、3割以下できた:2、ほとんどできなかった:1）

<質問9> 音楽活動の題材選択は担当者に任されていますか

a. 全面的に任されている	b. 3/4程度任されている	c. 1/2程度任されている
d. 1/4程度任されている	e. ほとんど決まっている	f. その他

<質問10>. 所属、性別、勤務年数について、該当する記号を○で囲んでください。

所属（ a.幼稚園 b.保育所 c.幼稚園・保育所 d.その他 ） 性別（ a. 女性 b.男性 ）
勤務年数（ a. 1年未満 b. 2～3年 c. 4～6年 d. 7～10年 e. 11～20年 f. 21年以上 ）

<参考・引用文献>

- 1) 平成 18 年 10 月 4 日、文部科学省より発表された施策である。7つの施策の柱 ①幼稚園・保育所の連携と認定こども園制度の活用の促進 ②希望するすべての幼児に対する充実した幼児教育の提供 ③発表や学びの連続性を踏まえた幼児教育の充実④教員の資質及び専門性の向上 ⑤家庭や地域社会の教育力の再生・向上 ⑥生涯学習振興施策における家庭や地域社会の教育力の再生・向上 ⑦幼児教育を地域で支える基盤等の強化、を掲げている。この直後 12 月に平成 21 年度より施行の幼稚園教育要領案が発表される。
- 2) 前掲「幼児教育振興アクションプログラム」文部科学省 2006、7つの施策の柱の第 5 項目。
- 3) 福谷章子「現代の母親の子育て観にみる役割不安」淑徳大学大学院修了論文 1998、…個人の権利が自明なものとされる風潮において、親の権威や抑制力は、親役割として期待されにくい。親の統制下で関与されて育った教育熱心な現代の母親たちは、自らが親役割として認知していた親の姿と、現代社会が役割期待として要請している姿とのほごまで、親としての役割を遂行する手だてを獲得しにくい。また、物や情報が溢れる社会環境が統制力を弱めた親を飛び越して子どもたちに直接関与することにより、母親たちがいなく子ども観から逸脱した子ども像が見え隠れする。そのことが、母親の自信喪失感をさらにおおる。…
- 4) 文部科学省が示すもので、小学校の場合 ①発表・表示用教材 ②道具・実習用具教材 ③実験観察・体験用教材 ④情報記録用教材 の 4つに分類されている。
- 5) 野崎宣器「音楽科教育における授業設計 —認知形成の視点から—」学位論文、1994 に教材の機能として ①教材としての機能 ②情報としての機能 ③媒介としての機能 ④媒体としての機能の 4つを挙げている。
- 6) 宮下保司「見る・記憶する・想像する：脳科学の最先端」公開講座・講演会 東京大学公開学術講演会の記録「…イメージを創る力の根本は能の高次視覚領野から低次領野へと情報を送り返す「逆行性」の情報の流れ—トップダウン信号とも呼ばれる—にあります。」
- 7) ⁵⁾に同じ。